

1 「いただきます。」

私は、世界の食べ物の中でカレーがいちばん好きだ。カレーだと、必ずおかわりをしなくては気が済まない。カレーのどこが好きなのかと聞かれてもおいしいものはおいしいのだから理由などない。

この前、学校の林間学校で、飯盒炊さんをしてカレーライスを作ることになった。2 まず、学校の授業で、カレーに使われる材料や、カレールーの歴史などについて調べ、発表をした。そこで、カレーの材料にはいろいろな人が関わっていること、また、長い歴史があることが分かった。そして、自分の家で、一人でカレーライスを作ることが夏休みの宿題の一つとなった。

3 カレーが大好きな私でも、生まれてから一度もカレーを自分で作ったことはなかった。母に教えてもらいながらやつのことで作り上げたが、その時、こんなに大変なのに林間学校で自分たちだけで作れるのかと不安になった。

4 その不安を抱えたまま、林間学校が始まり、二日目の夜に飯盒炊さんが行われた。もし、作ることができなかつたら、私たちのその日の夜ご飯はなしになってしまう。私は薪の係りだった。お米を研ぎ、野菜を全て切り終わった後に火をつけた。5 その火はまる

で、紅葉したモミジのように真っ赤だった。途中で、火が消えそう

になって慌てたが、以前、火を作る練習をした時、火が消えそうになつたらうちわであおげばよいと習ったのを思い出した。みんな

で、一生懸命うちわであおぐと、消えかけていた火が勢いを

盛り返した。6 しばらくすると、飯盒から、水滴がたれてきた。薪

でさわってみると、ぐつぐついついてる振動が手にも響いてくる。「やったあ。」

なぜみんなが喜んでいいのかというと、そうならたらご飯が炊けたという合図だからだ。7 本当にできているか確かめるために、火か

ら下ろし、軍手をした手で飯盒のふたを開けてみた。すると、真珠

のような真っ白なご飯が姿を現した。そのご飯を見たとき、私はとにかくうれしかった。

ご飯は、飯盒ごと逆さにして蒸しておき、私たちはカレーの鍋の方に取り組んだ。8 しかし、このあと、私たちは小さな失敗をしてしまった。水を多く入れ過ぎてしまったのだ。鍋の中はびちゃびちゃになっていたが、私たちはあまり気にすることなく作業を続けた。そして、やっとカレーの方も完成した。

9 「いただきます。」

と声をそろえ、一斉に食べ始めた。私は水が多すぎて、おいしくないカレーになっていないかと思っていたが、その心配は無用だった。なぜなら、家のカレーよりもおいしかったからだ。私は、もちろん、それをおかわりした。

10 この飯盒炊さん以来、私はもっとカレーが好きになった。母が、今日の夕飯もカレーだと言っていたので、とても楽しみた。

(言葉の森長文作成委員会 △)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 「いつてらっしゃい。」と妹、「早く帰ってきてね。」とぼく、そして、「気をつけてね。」と母の声。
「行ってくるよ。ゆうすけ、あつこちゃん、学校がんばってな。」毎朝、同じ会話が交わされ、静かな朝の道へオートバイが走り出していく。父の出勤だ。

2 父は、消防署に勤務している。いつ、どこで発生するかわからない火災や事故を相手にする緊張した仕事だ。朝出勤すると翌日の朝まで帰らない。日曜も祭日もなく一日おきに勤めている。非番で家にいる日も午前中は寝ている。前日は勤務で寝ていないからだ。

3 父が寝ている間は、家族も音を立てないようにして歩かなければならない。「いやだ。消防署なんてやめちゃえ。」と、父の仕事を憎く思ったこともある。しかし午後、目が覚めると僕と妹に本を読んでもくれたり、一緒に遊びに出かけてくれたりする。制服を脱ぐと本当に優しい父だ。

4 三年生のとき、社会科で消防署の仕事について習った。市民の安全を休みなく守る消防士さん、それが僕の父なのだ、と思ったとき、僕は初めて父の仕事に感謝し、その仕事を誇りに思った。

無遅刻、無欠勤で働き続けたために、署の招待で家族旅行に行ったこともある。5 新婚旅行をしなかった両親にとって、結婚十周年を兼ねた旅行となり、とても楽しかったそうだった。また、十五年勤務のお祝いには、母も消防署に招かれ、感謝状を贈られた。

「火災出勤があるよね、神様に手を合わせて、どうか無事に勤めが果たせますように、って拝むのよ。」

と母は話してくれた。6 冬の夜、緊急の出勤があるときも、母は飛び起きて父を送る。そのあと風呂をわかしたり、布団をあたたためたりして、寒くても父の帰りを待っている。そんな母の心づかいを、きっと父も感謝しているに違いない。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

7 父の頭の中はまるで市内の地図だ。休みの日、車で街を走ってもらうと、いろいろな道を知っていることに驚く。地図で調べたり、道を聞きながら走ったりしたのは火事が広がってしまうから、父にとっては当たり前のことなのだろう。

8 「消防士の仕事は、一秒が大切だ。だからといって、早ければいいわけじゃない。失敗や事故は許されないから、正確でなくてはならない。だから、心にゆとりを持つことだ。そして、いつでもきちんと動けるように、体を大切にしないとね。」

父はそう話す。9 なんだか父の勤務への心構えは、いつも僕たちに何かを教えているように思えてくる。

健康な体。早く正確に。心にゆとりを。多くの人の、仕事や日々の生活にとって、同じように考えられると僕は思うのである。

(言葉の森長文作成委員会 し)

0

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 「まあ、ありがとう。」

祖母は目を細めた。今日は、祖母の七十歳の誕生日。古希と言
う、おめでたい節目の年齢だ。私は、小さいころから大好きだった
祖母にどんなお祝いをしようかずっと頭を悩ませていた。2 一つ前
の六十歳のお祝いのときは、小さくてまだ何もわからなかったの
で、特別な年の誕生日はこれが初めてである。最初はお小遣いを貯
めて、喜ぶものを買ってあげようかと思っていたのだが、お年寄り
の気に入るものを選ぶのはなかなか難しいし、お金も足りない。3
そこで、私は自分にしか作れない手作りの贈り物をすることにし
た。作文、詩、手紙、絵、私は自分が得意なもので勝負しようと思
えた。親友のちかちゃんのように手芸が得意だったらさらによかつ
たのだが。

4 私は、いろいろなアイデアを頭にめぐらせた。祖母がびっく
りするようなもの、記念になるようなもの、そして何より私らしい
ものがないと思った。私は書くこと、創作が大好きだが、とりわ
け、物語を作るのが好きだ。5 そうだ、祖母の登場する物語、い
や、いつそのこと、祖母の伝記を作ってみよう。私は自分の壮大な
企画に驚いたけれど、まだ時間はあるし、ぜひやってみようと思っ
た。祖母にわからないように、母や親戚のおばさんたちから話を集
め、少しずつ書き溜めた。6 祖母が若いころのモノクロの写真も手
に入れた。父の手も借りて、パソコンを使って編集した。字は祖母
に読みやすいように大きなフォントにした。きれいな色のかわいい
イラストも入れた。

7 お祝いの会直前に仕上がった「おばあちゃんの伝記」は、予想
以上のできばえで、大人たちの豪華なお祝いの品にも見劣りがしな
い気さえした。うれしいことに祖母は、会の間中、何度もそれを手
にとって見ていた。8 私は、正直なところ、自分がここまでできる
と思わなかったのだ。9 どうしてこんなにがんばれたのかを考えてみ
た。そして、作っている間中、いつも祖母の喜ぶ顔を思い浮かべて
いたことに気付いた。10 今までは、祖母からしてもらったことばかり
だったけれど、今度は祖母を喜ばせることができるかもしれないと
いう思いが原動力となっていたのだ。私は、この体験を通じて、人
間にとって贈りものとは、贈る相手のことを考え、それを形にする
という行為なのだなと思った。

(言葉の森長文作成委員会 ぬ)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34